

千種 堅著

モラヴィア

二十世紀イタリアの愛と反逆



中公新書

944



中公新書 944

千種 堅著

モラヴィア

二十世紀イタリアの愛と反逆

中央公論社刊

千種 堅 (ちぐさ・けん)

1930年(昭和5年)、東京に生まれる。
1953年、東京外国語大学ロシア科卒。東京
外国語大学、立教大学講師を経て、現在、
愛知大学客員教授。イタリア文学者。本名、
川岸貞一郎。

著書『ダンテの末裔たち』(三省堂)
『イタリア人の発想』(徳間書店)
『四柱推命人間学』(河出書房新社) 他

訳書 ガッダ「悲しみの認識」(中央公論社
『新集世界の文学46』)

ビオヴェーネ『冷たい星』(河出書房
新社)

チェーヴァ『テスケレ』(河出書房)

パリーゼ『彼女と彼』(角川文庫)

ジャッシャ『モロー事件』(新潮社) 他

モラヴィア

中公新書 944

© 1989年

検印廃止

1989年10月15日印刷

1989年10月25日発行

著 者 千 種 堅

発行者 嶋 中 鵬 二

本文印刷 三晃印刷

カバー印刷 大熊整美堂

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7
振替東京 2-34

ISBN4-12-100944-4

第一章 演 技……………3

ノーベル文学賞 “万年” 候補 5

知られざるモラヴィア、知られざるイタリア 7

知識人中の知識人 10

所詮、移民の子、されど…… 11

ペンネームとは言いきれない “モラヴィア” 14

幼くして両親と断絶 16

姉弟・従姉妹ともなじまず 20

病気に翻弄された幼少年期 24

サナトリウムの体験小説 27

実際のサナトリウム暮らし 30

サナトリウムと景色 33

読書三昧 37

うまく逃げおおせた(?) 学校教育 40

第二章 反抗……………47

十代後半で長編を書き始める 49

台風の日——代表作『無関心な人びと』 55

『無関心な人びと』は“愛欲の書”か 60

実存主義作家からポルノ作家へ? 67

世相と無縁ではない作品 71

窮鼠モラヴィア、ファシズムに噛みつく 75

戦争にも背を向けて 84

共産党員になっても所詮“異端者”? 89

第三章 倦 怠 95

第二の代表作『アゴステイノ』 97

青春小説のなかの実存主義 103

非順応主義者の書いた『順応主義者』 108

虐殺嗜好 114

自画像的作品『軽蔑』 117

モラヴィアと大衆 124

第三の代表作『倦怠』 129

第四章 関 心 137

四十年目の区切り——『関心』 139

性の作家の行き着く所 145

ダイアログ小説『深層生活』 151

嘘のきわまるところ——『一九三四年』 158

三人の妻たち 163

予言者モラヴィア 167

そして『ローマの旅』 173

あとがき 181

モラヴィア年譜 184

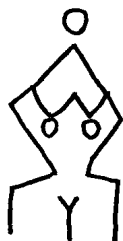
モラヴィアの世界 190

モラヴィア

——二十世紀イタリヤの愛と反逆

挿画 河原まり子

第一章
演
技



ノーベル文学賞「万年」候補

毎年、秋になると、気持ちがさわぐ。十月の第二か第三木曜日の夜、ノーベル文学賞が発表されるからだ。ひょっとしてモラヴィアが受賞するのではという期待をこめて。きわめて単純なファン心理のしからしむところで、ひいきのチームや力士が、あと一歩で優勝というところに来ている、そのときのファンのいらいらした気持ちに通じるとでもいおうか。

たしかに、このイタリアの作家、実力、業績ともに抜きんでて世界的なレベルにあると評価され、かねてからノーベル賞候補に擬せられている。それどころか、イタリアではもうすでに受賞したものと信じられている面もある。

これはイタリアの代表的新聞『コッリエーレ・デッラ・セーラ』紙（一九八八年五月十五日）が行った読書調査にも出ている。同紙は現存の文学者十人をあげて、五人がノーベル文学賞を受けているが、それは誰かというアンケートを求めた。もちろん、イタリア人読者が対象だから、イタリアの比率が多くなっているが、参考までにその結果をあげておこう。

〔正しい回答〕

ガブリエル・ガルシア・マルケス	三五%	ヨゼフ・ブロッツキ	九%	ソウル・ベロー
一〇%	エウジェニオ・モンターレ	六〇%	ハインリッヒ・ベル	一〇%

〔誤った回答〕

アルベルト・モラヴィア 五五%、プリーモ・レーヴィ 四〇%、マルグリット・ユルスナール 一三%、ジュゼッペ・ウンガレッティ 四一%、ホルヘ・ルイス・ボルヘス 一八%、イタリアの詩人、モンターレの受賞を正解した人が六〇%と圧倒的に多いのは当然として、モラヴィアが受賞したものと勘違いしている人が五五%もあるのはおどろきだ。ついでに数値の多いのが、モンターレ、モラヴィア、ウンガレッティ、レーヴィとイタリア人に集中しているのは身びいきの表れだろう。

こうして、モラヴィアはすでに受賞していると思われるぐらいに、ノーベル賞の至近距離内にいる作家である。それこそ、二、三十年というものの、今年こそ、今年こそで来たわけで、文字通り「万年」候補の名にふさわしい。同じようにさらしものになっている作家にはグレアム・グリーンがいて、万年候補の双壁とされている。しかし、さらしものといっても、目の前にぶらさがっているのがノーベル賞なのだから、これはやはり、ただごとではない。立派に巨人の名にあたいしよう。

ついでながら、モラヴィアはノーベル賞を受けられないと断言する声を聞いたこともある。それはバチカンの禁書目録に載った「前科」があるからだという。この目録にはカトリック信者に読むことを禁じた本が並べられている。

知られざるモラヴィア、知られざるイタリア

それほどに大きな存在なのに、わが国での評判はさほどでもない。一九五〇年ごろから、ちゃんと翻訳紹介がなされているというのに、ほとんど知られるところがない。好きなひとはめっぽう好きだが、これがまったくの少数派である。モラヴィアといってすぐに通じるのは、まあ、外国文学にただならぬ関心を寄せているひとたちに限られるのではないか。特にイタリア文学を仕事にしているわたくしなどは、サルトルやカフカの名前を口にするのと変わらない意識で、モラヴィア、モラヴィアと書いたり、しゃべったりしているが、世間では、かなりのインテリの間でも、モラヴィアは「無名」の存在と言っている。

わたくしは試みに文科系の学生五十人にモラヴィアの名前を知っているかと尋ねたところ、一人も知らなかった。サルトル、カフカは全員が知っていたというのに。

これはモラヴィア理解の前提となるイタリアそのもの、あるいはイタリア語に対する日本人の関心の薄さがわざわいしているのだろう。イタリア文学といえば、ダンテ、ボッカッチョ、ペトルカといった超古典にさかのぼってしまうし、イタリア語を学ぶのは音楽、美術の専門家、イタリアという国はG7には入っても、G5からは外れてしまうという理解が常識的だろう。まあ、最近では映像やデザイン関係で注目を浴びて、理解の幅も少しは広まっているだろうが、圧倒的

なインパクトというところまでは行っていない。

もうちょっとしぼって考えると、日本にとつての先進国はやはり英米独仏であり、外国文学といえはこの四カ国にロシアが加わるのがせいぜいだ。事実、十九世紀にはこれらの大国にくらべると、イタリアでは世界的レベルの作品が出ていない。当然ながら、わが国の大学では英米文学科から始まって仏文、独文、露文が主流となっている。伊文という表現はまったくなじまない。

十九世紀も終わりから、今世紀初頭にかけて、やっとダヌンツィオ、ピランデッロという大きな存在が登場し、おりからムッソリーニのファシズムと結んで、日独伊の同盟関係が成立したこともあって、この二人は積極的に紹介されたものだ。ところが、第二次大戦で枢軸陣営が敗北すると、一挙にイタリアに対する関心も失せてしまった。とくにダヌンツィオは本国でもファシズムがらみで悪の代名詞なみに扱われたぐらいだから、わが国でもすっかり人気を失ったが、それにしても、ラテンの熱い血というのだろうか、イタリア人の価値判断の転換ぶりはすさまじい。ファシズムの象徴のムッソリーニはともかくとして、ダヌンツィオに対する評価も仮借なく、戦後民主主義文学、ネオレアリズモ文学の合言葉は「反ダヌンツィオ」となったぐらいである。いかにも流行、ファシズムの国にふさわしく、われもわれもと「反ダヌンツィオ」の合唱に加わったものだ。わが国ではイタリアそのものへの関心の低下とともに、ダヌンツィオもまったく無視されることとなった。

ところが、戦後、かつてのファシズムの国、イタリアはそれこそ価値の大転換で、ヨーロッパ最大の共産党をかかえる国となり、ネオレアリズモ（新リアリズム）という言葉を世界的にひろめた一連の映画が生まれ、それが文学に反映して新鮮な作品が登場し、それと並行してファシズム時代に冷遇された作品群が復活する……というふうにして、ヨーロッパでもとくにダイナミックな文化のにない手として登場することになる。といっても、それが日本に及ぼした影響はロッセリーニ監督などの映画を別にすれば微々たるものだった。その微々たるなかに、わがモラヴィアの作品群も入っていたのである。

そして、戦前の英米独仏露の優位という世界文学での力関係が次第に崩れていくなかで、イタリア文学とスペイン語の中南米文学の比重が次第に高まっていった。そして世界的に関心を集めるようになったイタリア文学の中枢にいたのがモラヴィアであり、一九五九年には国際ペンクラブの会長に選ばれている。

“万年”とはいえノーベル賞候補、そして国際ペンの会長をつとめたとあれば、これはもう並の作家ではなくなる。並ではないというのは、群を抜いたことでもあれば、尋常ではない、特異だということにもなる。さよう、モラヴィアはまったく特異な作家であり、わたくしは密かにドラマチックな作家という形容を用意している。みずからドラマを生きている作家という意味である。

知識人中の知識人

イタリアの作家・評論家オレステ・デル・ブオーノが新聞に書いているところによると、モラヴィアはイタリア一の *tuttologo* と呼ばれているそうだ。変わった単語で、普通の辞書には出ていないが、意味は分かる。*astrologo* (占星術師、つまり星の専門家)、*fsiologo* (生理学者) と共通する *logo* という語尾がついていて、これは専門家、学者を意味する。*tutto* は「全」「すべて」の意味で、要するに物知りということだが、単に常識に富んでいるというだけではなく、専門家なみ、学者なみに知識があることになる。

また、モラヴィアにインタビューをして、『王様は裸だ』という本をまとめたベルギーの女性ジャーナリスト、ヴァニア・ルクシクはこのインタビューの冒頭で、こう言っている。

「新聞記者たちは、赤い旅団について、フットボール世界選手権について、新法王について、あるいは試験管ベビーについて、うるさくあなたに問い質し、あなたの意見を聞こうとするのをやめません。イタリアではあなたは大作家アルベルト・モラヴィアであるだけではなしに、あらゆる問題について人びとから意見を求められる賢者アルベルト・モラヴィアでもあるのですが……。」

つまりどんな分野の問題でも常識的な範囲内なら、当意即妙に解説することのできる博学の賢人ということになる。尋ねるほうでも、モラヴィアに聞けば分かると当てにしているし、モラ